

■ 常染色体優性遺伝のパターン

このパターンにあてはまる、猫の遺伝性疾患

- ・PKD（多発性嚢胞腎症）
- ・HCM（肥大型心筋症）

クリア

病因遺伝子変異が検出されない場合で、その遺伝子変異が原因である病気にはならず、またその病気を発症する変異を後代に伝達しません。

ヘテロ接合

病因遺伝子変異が1つしか検出されませんが、常染色体優性遺伝の為、病気の症状が現れることがあります。（図1参照）

症状があらわれている場合は、かかりつけの動物病院での受診をお願いします。

繁殖において、他の個体と掛け合わせると発症性の組み合わせの子供ができる可能性があることに留意しなければいけません。

ホモ接合

2つの病因遺伝子変異が検出される場合で、発症する可能性が高い。

症状があらわれている場合は、かかりつけの動物病院での受診をお願いします。

繁殖において、クリアの個体と繁殖した場合でも、すべての個体が発症する可能性があります。（変異があっても発症しないキャリアがないため）

図1 遺伝子は、父親と母親からそれぞれ受け継いだものがペアになっています。
右図のように片方に変異を持っている遺伝子はヘテロ接合で、優性遺伝の場合、片方だけでもアフェクテッドとなります。



図2

